

【②】 わが庵は 都のたつみ しかぞ住む 世をうじ山と 人はいふなり

宇治神社にある、喜撰法師の歌碑です。『古今集』所収。『百人一首』にも採られ、宇治を詠んだ歌として、広く愛唱されています。



※私の庵は都の東南にあり、このように(心静かに)住んでいる。(それなのに)世間

の人は、世を憂きものと思つて逃れ住む、その宇治山だと、いつているらしいよ

「うじ」に「宇治」と「憂し」を掛けてあります。問題は3句ですが、「然ぞすむ^{しか}」であり、「鹿ぞ住む」を掛けないとするのが通説のようです。しかし平安時代から、鹿の意を含むと解釈する説も一方でなされ、現在に至っています。

「うじ山」は、喜撰山とするのが通説です。志津川集落東北の標高416mの山で、頂上付近に喜撰が住んだという岩窟があり、喜撰の像が安置されています。喜撰法師は六歌仙のひとりですが、伝記が明らかでなく、歌もこの一首が残るのみです。呪術を修行し穀を絶って長生きし、喜撰山の頂上から雲に乗って飛び去ったと記す書もある、謎の歌人です。

【③】 山門を 出れば日本ぞ 茶摘^{たがみきくしゃ}うた



万福寺

万福寺境内の田上菊舎の句碑です。宇治の文学碑として、おそらく最もよく知られたものでしょう。菊舎は江戸後期長府(山口県)の俳人。24歳で寡婦となり、28歳で剃髪して、以後は仏道と風雅を求めて諸国を旅しました。

菊舎が宇治を訪れたのは、寛政2年(1790)38歳の春です。「黄檗山のうちを拝しめぐり、誠に唐土の心地し侍れば、」と記しています。万福寺を拝観するうちに、実際に中国にいるような雰囲気に浸り、山門を出た際に詠まれた句です。宇治の茶摘み歌を聞いて、唐土の夢から覚めたように、ここは日本であったのかと気づいたというのです。

菊舎の万福寺で受けた感動は深いもので、中国文化に関心を抱き、やがて菊舎は漢詩を作るようになってゆきました。万福寺の句は、菊舎の代表作であるとともに、文芸上の転機となった体験を詠んだものといえましょう。万福寺を出た菊舎はその日、三室戸寺・源氏物語の古蹟・茶屋通円・橋寺・恵心院・興聖寺と巡り、宇治の俳人と交流しています。

【近現代の詩歌】

【④】 ものゝふの やそうち川に すむ月の 光に見ゆる 朝日山かな

宇治橋西詰「夢の浮橋広場」に建つ、明治天皇の歌碑です。

明治10年大和行幸の途上、明治天皇は、2月7日に宇治の「萬碧楼」



宇治橋

(現在の「中村藤吉平等院店」にあった旅館)を行在所としました。夜、宇治川に臨むと風光すこぶる佳く、月を賞して詠まれたと『明治天皇記』に記されています。朝日山は歌枕として古歌に詠まれ、観月の勝地としても知られてきました。思いをそのままに詠み、おおらかに澄んだ、いかにも帝の歌にふさわしい詠であると思います。明治天皇は歌を愛した方で、かつて岩波文庫に『明治天皇御集』が収められていました。

【⑤】 春風の 扉ひらけば 南無阿弥陀仏

放浪の俳人種田山頭火も宇治を訪れています。山頭火は昭和11年3月、京都から月ヶ瀬に向かう旅の途中に宇治に泊まりました。句は平等院で詠まれたものです。

句意は「うららかに春風の吹くなか平等院の扉が開くと(阿弥陀様のお姿が拝され)南無阿弥陀仏の称名がひとりでの口をついて出ることだ」ともなるでしょうか。他の解釈・鑑賞も可能な、広がりのある句です。

苦しみの多い人生を送った山頭火ですが、宇治の旅では、いかにも穏やかで楽しげです。春の平等院を楽しむ心と、弥陀や浄土を思う安らかな心がうかがえるようです。句碑は、平等院の傍、宇治市観光センターの敷地に建てられています。